# 劇評 THEATER

# TRANS トランス

## Performed by the Theater PINK TRIANGLE


ライタープロフィール

希在 (Kiari)
大学を卒業して以来、ずっと真摯な会社員。毎日、顧客満足と売上拡大を目指し努力する自分へのご褒美として舞台鑑賞や小説や B 級映画、おいしいものを楽しんでいる。楽しみを感じることを忘れず、それが人に伝わるように残したいと願う。趣味の文章書き。

『トランス』作・鴻上尚史
白水社 /1400 円

『劇団 PINK TRIABGLE ／ LABO POROJECT vol.01』公演『トランス』を見た。

精神科医の紅谷礼子、ライターの立原雅人、おかまの後藤参三。高校時代の友人であった彼らは、雅人が精神病院を訪れたことをきっかけに偶然再会し、久しぶりに酒を酌み交わした。雅人は最近一日のうち数時間記憶がなくなることがあると二人に話した。次の日､雅人は突然自分は天皇だといいはじめる…。彼の治療をする礼子と看病をする参三、三人の関係はどのように変わっていくのか？ 彼らの過去に、なにがあったのか？ どのような結末を迎えるのか？ というストーリーだ。

この『トランス』という作品は、鴻上ファンのわたしにとっても特に好きな作品だ。戯曲本はセリフを覚えるほど何度も読んでいるし、舞台も３バージョンほど見たことがある。

PINK TRIANGLE はレズビアンとバイセクシャルの女性だけで構成された劇団だというので、女一人男一人おかま一人というこの舞台をどのように料理するのか、見る前からとても興味があった。

+

率直な感想だけど､､､彼女たちの思いは伝わったんだろうか。ラストシーンの台詞から、また、織り込まれたチラシから、彼女たちの伝えたかったメッセージは「異性愛が正常、同性愛が異常といった考え方が普通、という考え方はもう終わりにしよう」というものに見えた。が、舞台全体からは正直言ってあまりそのメッセージは伝わってこなかったように思う。

これは、わたしが『トランス』という舞台を見慣れているからそう感じるのかもしれない。でも劇団の特殊性を意識せずただ舞台を観にきた人は、「なぜ男の人やおかまを女性が演じなければいけないのか？」という疑問をもってしまわないだろうか。わかりにくくなるだけでメリットがあまりないじゃないか、と。それと、いまいち結論が納得できない。この『トランス』という舞台のラストは、２人が演じては「それはあなたの妄想だ」ともう一人が否定することを繰り返し、どこまでが現実でどこからが妄想なのか、誰が正常で誰が異常なのかわからなくなる。そこでただ「正常・異常という考え方はもう終わりにしよう」と終わられても､「えええっ、それでいいの！どうして！納得できない！」と思ってしまう。

チラシやメンバー構成など、総合すれば伝えたいことはなんとなく伝わってくる。だけど、舞台そのものから伝わってこなければ､「観劇」に来た人の心は打てないとわたしは思う。

+

原作では、鴻上さんはラストシーンに備えて、人物やエピソードを丁寧に描いていた。

まず、３人は次のような人間だ。

紅谷礼子：
性的な行為に嫌悪感を持つ。
自分の思ったことをなかなか口に出さない。
他人の悪口が嫌い。

立原雅人：
要領よく現実を渡っていける。
性的な行為に対してもわりとアバウト。
しかし、最近そんな自分に不安を感じるようになった。

後藤参三：
昔は対人関係に悩んだが、おかまになったことをきっかけにふっきれた。
しかし、情が深く、好きな人におぼれやすい。

三人ともそれぞれ弱みがあり、その部分で狂気に陥る可能性を持っている。また、それぞれ他の二人の弱みを知っていて、もしもそれで苦しんでいたならいつでも支えてあげる用意がある。そして、自分がダメになったときには誰かに支えてもらえることを知っている。だから、ラストシーンで正常と異常の境目がわからなくなったときでも、正常か異常かなんてどうでもいいことだと微笑むことができるのだ。そのような関係の人がいるという幸福こそが自分にとって大切なのだということを、感じることができるから。

原作で鴻上さんが伝えたかったことは、たぶんこういうものだ。おかまは出てくるけれど、セクシャルマイノリティについては考慮されていない。その戯曲で自分達のメッセージを伝えたいのであれば、特に、ラストでそれを語らせたいのであれば、原作を多少犠牲にしても、それが伝わるように大胆に書き換える必要があったんじゃないか。たとえば、女二人、トランスジェンダーの女一人の脚本に変えてしまうとか。

+

今回の舞台は、「セクシャルマイノリティについての考えを盛り込みたい」「参三の描かれ方を演じ方だけで変えたい。それを証明するために、テーマは変えたくない」という相反する２点があったために、メッセージ性という意味では中途半端な舞台になってしまったように思う。

この劇団 PINK TRIANGLE の舞台は今回はじめてみたが、原作に気兼ねのないぶん、オリジナルの戯曲のほうがおもしろいんじゃないだろうか。

演技のほうは楽しめた。

特に葉月薫さんの参三は、愛らしくていじらしい。見ているだけで微笑んでしまう。

葉月さんは「偏見のある描き方をされている参三像を変えたい」と感じていたようだけど、それは成功かな。もっともわたしは参三が偏見のある書かれ方をしていると感じたことがないので、どの程度払拭できていたのかはあまり判断できないのだけれど。今までそう感じていた人はどう思っただろう。

＜参考＆参考ＵＲＬ＞

■劇団『第三舞台』
http://www.thirdstage.com/

■第三舞台
「まず第一舞台がありまして、それはスタッフとキャストが力を合わせた舞台のこと。第二舞台は観客席。第三舞台は、第一と第二の舞台が共有する幻の舞台。劇団の自己満足に終わらず、お客さんが付き合いで来ているだけでもない、最上の形で共有する舞台、ということで第三舞台と名付けました。」
（鴻上尚史 / 早稲田演劇新聞 1981.VOL7 より）

■作･演出鴻上尚史「トランス」について本人へのインタビュー
（1993 年 9 月 21 日）
http://www.thirdstage.com/dsbt/trans93.html

なかなか見に行けない、時間が合わない、そんなことやってるの知らなかった、というのが私たちのレズビアン文化。2003 年 1 月 24～26 日に東京都中野区の｢スタジオあくれ｣で劇団 PINK TRIANGLE による、鴻上尚史作葉月薫演出「『トランス』の上演が行われました。劇団 PINK TRIANGLE では、この回から「LABO PROJECT」と題して既成の台本をレズビアンの視点で読み直してみようという試みが始まったと聞きます。地方公演はないのかな。

他にも見た方がいらしゃったら、ご意見・ご感想をお寄せ下さい。（編集部）

grrls@nifty.com


Feminism and Lesbian Art Magazine

"iratsume"
Vol.1

1st. edition / March 1, 2003



＊無許可の転載・転送・コピーを禁止します。

copyright ⓐ Cherry J & mike
issued in Kyoto, Japan


http://selfishprotein.net/lesart/